

# 初代飯塚桃葉の蒔絵作品（その2）

— 妙心寺天授院蔵「蓮池雲龍蒔絵厨子」一基 —

永島 明子

はじめに

前号の『学叢』に示したように<sup>①</sup>、飯塚桃葉は印籠蒔絵師として名を馳せ、阿波徳島藩御用蒔絵師としても活躍した江戸の名匠である。元の名を源六といい、宝暦十四年（一七六四）に徳島藩主蜂須賀重喜（一七三八〜一八〇一）に召し出され、桃葉と改名し、観松斎知足の銘を仰せ付けられ、明和六年（一七六九）の重喜の隠居後も隠居と藩主治昭の両方に仕えて天明七年（一七八七）に剃髪、寛政二年（一七九〇）に病死している。諱は秀久という。

今回紹介する厨子（図版16〜19）の存在は、実は『学叢』第二十二号において久保智康氏が「金梨地蓮池文平蒔絵（扉内面は雲龍文高蒔絵）厨子」と記した時点で報告されていた<sup>②</sup>。久保氏のご教示によりこの厨子に蒔絵師の銘があることを知り、写真を見せていただいたところ、「蒔絵師 飯塚桃葉作（花押）／金具師 片岡三郎兵衛」の蒔絵銘（図版19、挿図1）が認められた。職業、姓名に「作」の字を加えた桃葉の銘はほかに例を見ないが、その字体と花押の形とが、既に知られている「観松斎（花押）」「桃葉（花押）」などで見

慣れたものと一致するように見受けられたため、早速、所蔵者である妙心寺の僧堂、天授院を訪ね、厨子を拝見した。向かって右の扉の蝶番の鉸が失われていたため、右扉がはずれていたほか、いくつかの飾り金具が欠失していたが、龍の迫力と蓮の葉のしなやかさを描き出す蒔絵の保存状態は良好で、初代桃葉の作と納得がいった。久保氏も述べているように、この厨子に納められた塔と像の来歴は、多分に創作が含まれると考えられるものの、江戸時代より一般に知られて来た。これを納めるために、ある限られた時期に制作されたことが推測できるこの厨子は、初代桃葉の活動の幅を示すものと思われたので、ここに紹介することとした。

構造（図版16〜18）

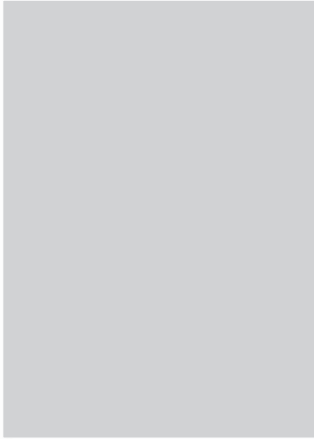
木製、指物製、底面形を入隅長方形とし、屋根を甲盛とした観音開の厨子。

入隅長方形の板の上面稜線を唐戸面取りして基台とし、その外周から二cmほど内側に平行する位置に側板を立てて、上部に甲盛で縁を彫り出した入隅長方形天板を乗せ、その四隅を反り上げて屋根と

する。側板は、両側面の前後半ばやや前よりの位置に、上中下三段の蝶番をつけ、そこから後ろはひとつづきの壁面として基台と屋根を固定する一方、前は前面中央で合わさる左右の扉（外面は入隅、内面は隅丸形に曲がっている）を構成する。向かって右の扉に、表を丸面取りとした召し合わせを作り出し、輪宝を象った留金具で左右扉を閉める（挿図2）。

内部には隅丸長方形の台を作り出す（恐らく基台と一体構造）。台の側面の後ろ半分は厨子背面の壁と密着する。前半分には幅広の溝を彫り、その左右の隅と中央に格子間を彫り出す。台の前方左右に円柱一本ずつを立て、円柱の上端を屋根の庇に固定する。前庇直下には円柱より内側に飾り幕板をつける。

内陣には、天板下の四周に彫り板をつけそこから猫脚を作り出した隅丸方形の台を置いて、紅縮緬の布団を敷き、その上に銅観音菩薩立像を納めた銅三重塔を置いている。ぴったりと寸法があっているため、この塔のために制作された厨子であることはまず間違いない



挿図1 扉裏の蒔絵名



挿図2 厨子扉留金具

い。この塔を収納し、運搬する際のパッキングとして、白地蝶牡丹文様銀入錦で作った布団（両脇用細長二本、天井用一枚）と瑠璃地蜀江に瑞雲文様金入錦の布団（前面用幅広一枚）を伴う。

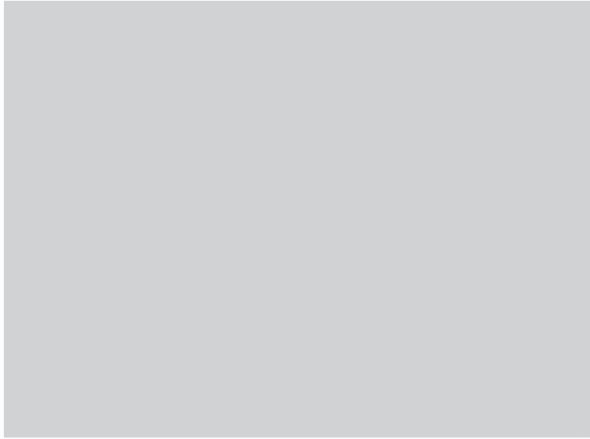
飾り金具は、金銅製魚々子地に唐草文を浮き彫りとする。扉の留金具と蝶番のほか、屋根の四隅と前後（この内、左前と後は欠失）、側板の四隅上中下、召し合わせの上中下、基台部側面の四隅と各面中央、円柱の上下、幕板上部、内陣の猫脚台の四隅に打たれている。法量は幅二〇・六cm、奥行一八・〇cm、高三八・〇cmである。

#### 蒔絵の技法と意匠（図版16～19）

外面は底面を疎らな梨地とするほかは玉梨地とし、内部は猫脚台を含め、オレンジ色の強い詰梨地とする。

屋根の前中央には、金銀平蒔絵に金付描で大きな輪宝を一つ描く（挿図3）。

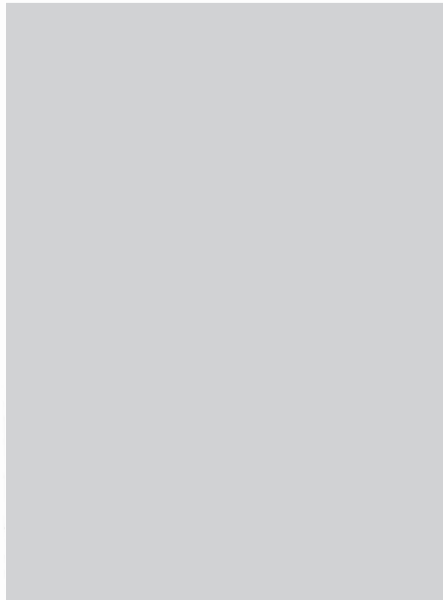
扉と側板の外面は連続する一面面とし、金付描によるやわらかな流水文の中に、金銀平蒔絵に金付描を併用して、蓮の葉、花と蕾を描く。蓮の茎には細かい毛を描き、枯葉の縁を細かく縮れた輪郭で表している（挿図4）。前面扉部分では、金平蒔絵を基調として葉のところどころに銀粉を蒔き暈かして陰影をつける表現とする一方、背面では銀蒔絵が主で、酸化して青みがかった銀の中に金付描の細線がくつきりと浮かび上がっている。金を基調とした前面では、流水文のうねりが細かく密であり、花は満開で、葉も勢いよく開き、華やかな印象であるのに対し（挿図5）、背面に向かうにつれて、銀粉の使用が増え、流水もゆるやかとなり、余白の多い構図に枯れた葉と蕾が一つという静かな画面となり、厨子の前後を強く意識し、



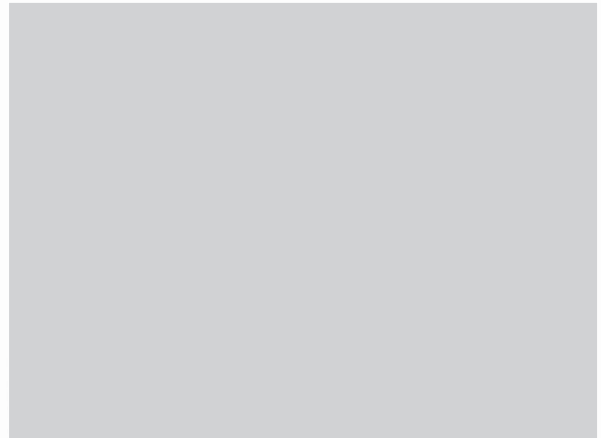
挿図6 扉裏の瑞雲



挿図3 屋根前中央の輪宝文



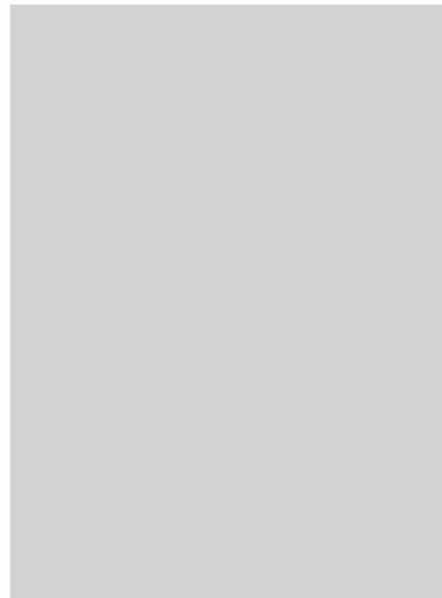
挿図7 扉裏の波頭



挿図4 厨子背面の枯れた蓮の葉



挿図8 向って右扉裏の降り龍



挿図5 厨子前面の流水と蓮

動静のめりはりのある意匠を志向した様子が窺える。

内部の幕板には卍繫文を、円柱には青海波文を、金平蒔絵で描く。扉の内面には、上部に瑞雲、下部に荒海の波頭を、極薄い金薄肉高蒔絵、くつきりとした描割、金付描で表し、ところどころ銀粉を蒔き暈かし、さらに雲には細かく不揃いの金切金を（挿図6）、波頭には銀鋌による水しぶきを散らす（挿図7）。雲と波頭の間には、向かって右の扉では阿形の降り龍、左の扉では吡形の昇り龍を、鱗の一枚一枚を描割る金、銀高蒔絵と、朱漆、玉眼を用いて描いている。龍は三本爪で双角をはやしている（挿図8）。

扉の召し合わせ内面下端に、二行並列に金付描で「蒔絵師 飯塚桃葉作（花押）」と「金具師 片岡三郎兵衛」の銘が書き込まれている（挿図1）。残念ながら片岡三郎兵衛については未詳である。この厨子の飾り金具はかなりの力作ではあるが、たとえば初代桃葉作として知られる「塩山蒔絵太刀拵」（個人蔵）の仕上がりなどには及ばないため、この片岡三郎兵衛は、精緻な刀装具を作る金工職人ではなく、腕利きのいわゆる鋳師であつたろうことが想像される。

### 厨子制作の時期と背景

結論から言えば、この厨子の正確な制作年代は不明である。また、既に蜂須賀家抱えの蒔絵師であつた飯塚桃葉がこの仕事を受けるに至つた経緯もわからない。しかし、明和四年（一七六七）から安永六年（一七七七）の間に制作されたのは確実で、以下に示すようにいくつかの契機が考えられる。

先述のとおり、厨子中の銅観音菩薩立像と銅三重塔の来歴は、江戸時代から有名であつた。明和四年、現栃木県鹿沼市の西見野村長

光寺境内で山崩れがあり、そこから萬里小路中納言藤房とされる「授翁」の銘のある柄鏡や中世の銅銭などと共に出土したというものである。ただし、この銘は明治時代の漢文学者に既に疑いを持たれ、戦前には銅鏡研究者によつて偽銘とされており、久保氏も共伴品の製作地と年代のばらつきから、出土品は江戸時代に寄せ集められた品々であろうと想定している<sup>3)</sup>。

出土品と関連文書を最初に詳しく紹介した田野井武男氏は、出土事件に関わる文書と塔と鏡の図を収録する『日蔭草』<sup>5)</sup>の当該箇所を全文翻刻している。その概要は以下のとおりである。

明和四年 (一七六七)	一・二八	元は臨濟宗、当時は曹洞宗の西見野村長光寺境内で山崩れがあり、唐銅塔一基、唐銅正観音像一軀、鏡一面、古丁銭九百九十一文、壺に入った雲母引きの紙の経文が出土。
明和五年 (一七六八)	一・二九 二・三	領主、松平豊前守より、幕府老中、松平右近将監へ、前年の長光寺での出土の届け出。 松平右近将監の仰せによつて、松平豊前守、老中列席へ差し出し。
	五・六	松平右近将監より、松平豊前守の家老、村瀬茂兵衛へ、老中列席御覽が済んだ旨、絵図面と書付は留め置かれる旨の通達。宝物下げ渡し。大切に保管するよう指示。
	五・一七	松平豊前守の家来、桑尾岡右衛門より、長光寺へ、大切に保管するよう、年に一度領主の点検を受けるよう指示。什物として下げ渡し。
	五月中	長光寺より、桑尾岡右衛門、佐藤丈右衛門へ、了解の返事。 曹洞宗の関東の役寺、大中寺より、寺社奉行へ、長光寺返事に添書を付した届け出。
	六月中	長光寺より、寺社奉行へ、一連の出来事と、塔、正観音像、古鏡、古銭などを残らず受け取った旨の届け出。
	七月中	長光寺章雲より、臨濟宗妙心寺派の江戸の役寺、済松寺へ、六月の届け出の済んだ旨、報告。
安永六年 (一七七七)	七月中	出土品、済松寺へ差し出し。
	八月中	出土品、妙心寺に納められ、塔頭天授院の什物となる。

また、田野井氏がさらに引用しているように、妙心寺に宝物が納まった年の二十二年後である寛政十一年（一七九九）に初版となった京の名所案内『都林泉名勝圖繪』にも既に、宝物が妙心寺に納められた経緯と、鏡の図および観音像を納めた塔の図が掲載されている。ここでは妙心寺二世授翁宗弼（一二九六—一三八〇）が藤原藤房その人であることの証拠として、藤房隠棲伝説のある地から出土した「授翁」銘の鏡が大々的に取り上げられている。

（前略） 特に近年明和四

年の春下野國都賀郡西見野村長光寺境内より掘出せし寶

器あり左に圖をあらはすこれらにて愈決定す此宝器領主より 將軍家の

台覽に備葵 御紋の御櫃を賜ふ毎歳一度づ、其領主より檢分ある

よしを命せらる然るに妙心寺の末院江戸牛込濟松寺の推舉に

よつて 官家へ申上て今天授院に贈りて靈寶となる（後略）

〔傍点筆者〕

これら二つの史料から、推定される制作時期の第一候補は、明和五年である。

『日蔭草』によれば、領主、松平（久松多古）豊前守勝尹（一七一三—一七六八）<sup>7</sup>より、幕府老中、松平（越智）右近将監武元（一

七三三—一七七九）へ、前年の長光寺での出土が報告された年で、報告から四日後には、出土品は老中列席の場に差し出されている。

『都林泉名勝圖繪』には、將軍家の台覽に備えて葵の御紋の御櫃を賜わったとあり、実際に台覽があったかはともかく、それを想定して出土品の体裁を整えたことが伝えられている。「領主より」「將軍

家の台覽に備」「葵 御紋の御櫃を賜ふ」とあるが、「御紋の御櫃」の直前に「將軍家」の直前と同じような闕字があるので、この櫃は多古藩ではなく、幕府が用意したものと考えたい。<sup>8</sup> 蒔絵の厨子も葵紋こそないが、これと同じ動機で調べられたものではなからうか。

出土から老中への届け出までには一年あるので、多古藩が用意周到に厨子を準備した可能性もなくはない。しかし、老中列席の場に差し出された塔と観音が既にこの水準の厨子に納められていたとしたら、他の出土品のための櫃を準備するのはよりたやすいことなので、幕府から櫃を賜わずとも済みそうなるものである。厨子の制作は、多古藩独自の企画というよりは、老中列席の場で大切な宝物として認定された後に、幕府関係者のとりなしで発注されたと推測したい。<sup>9</sup>

明和五年といえば、飯塚桃葉が御細工の褒美に銀十五枚を受け取ったことが知られている。<sup>10</sup> 一方、当時の阿波藩の財政は窮迫しており、藩政改革を推し進める藩主重喜と家臣との対立が頂点に達し、翌六年には重喜は幕府から隠居を命じられるに至っており、この頃の蜂須賀家から桃葉への発注は極少なかったものと推測される。この厨子も蜂須賀家の注文ではないと考えられる。

その根拠は「蒔絵師 飯塚桃葉作（花押）」の銘にも求められる（図版19、挿図1）。

蒔絵師の銘を研究している高尾曜氏は、飯塚桃葉が蜂須賀重喜から「御細工銘書」は「観松齋知足」と認めるよう仰せ付かっており、<sup>11</sup> 実際の現存作品も「観松齋（花押）」としたものが圧倒的に多いのに対し、桃葉の生前に発刊となった『装剣奇賞』<sup>12</sup> では「桃葉齋」とのみ紹介されていることに注目している。<sup>13</sup> 高尾氏はここから、「観



松齋」は蜂須賀家専用の銘で、巷で見られることはなく、外部の注文には「桃葉」「桃葉齋」「桃葉造」の銘が用いられたと推測している。つまり、「桃葉」はアルバイト用の銘であるということ、この説は大筋で妥当と思われる。そして、阿波藩抱えとはなつたものの、明和六年の重喜隠居によって安定した注文が入るまでは、桃葉はアルバイトも積極的にこなしていたことが想像されるのである。

この厨子の銘はまさに、そのような時期のものである可能性が高い。まず、「金具師」との分担を正確に示すためとはいえ、職業名「蒔絵師」を冠しているのが異例である。わざわざそのように名乗り、宣伝する必要のある相手が注文主、あるいは、鑑賞者であったことを物語るものであろう。長い銘である割に全体が4cmに収まるような目立たない大きさではあり、扉の召し合わせの裏に書くことで慎みを表したことになるのかもしれないが、厨子を開いた際、必ず目に入る位置にあるため、作者たちの主張が感じられる。通常ならば、銘は厨子の背面や底面に入れるところであろう。銘の内容から、少なくとも、蜂須賀家のための仕事ではないのは確かであるといえる。

制作年の第二候補は、一連の宝物が済松寺に差し出され、妙心寺に納められた安永六年までの数年間である。この場合は、すでに老中列席の場で認められ、長光寺で大切に保管されていた宝物を、あらためて別の寺院へ奉納するために、わざわざ厨子を新調したことになり、注文主はここでも長光寺や多古藩ではなく、彼らよりも裕福で有力な人物が想像される。ここで想起されるのが、『都林泉名勝圖絵』にあった「済松寺の推舉によつて 官家へ申上て今天授院に贈りて靈寶となる」の一文で、済松寺自身の注文でなければ、天

授院や済松寺にゆかりの公卿、さらには「官家」直前の関字から朝廷の関与さえ想定することができる。

ところで、『日蔭草』の記録が正しければ、済松寺は、明和五年に既に長光寺から届け出終了の報告などを受けており、当時から事件に関わりがあったようすが窺える。「授翁」の銘があったことから、ただちに妙心寺の江戸役寺に連絡が行ったものか、あるいは、穿った見方をすれば、済松寺自身が「授翁」銘の創作に何らかの形で関わった可能性もある。どちらの場合も、宝物の妙心寺への寄進は明和五年から企画されてもおかしくない、厨子を新調するのに安永六年を待つ必然性はない。結局、厨子の制作年は、明和四年から安永六年の間のことかの時点、と幅を持たせざるを得ないことになる。

以上のような背景と銘の内容を考慮すると、まず、この厨子の制作は蜂須賀家の仲介があつてもその注文にはよらず、注文主には、幕府関係者、済松寺、あるいは臨済宗妙心寺派とゆかりのある公家が想定される。次に、制作時の桃葉は、「蒔絵師」としてフルネームを記すほど、自らをプロモートしなければならない立場にあつたか、あるいは、この仕事をよほど大きな名誉ある晴れ舞台ととらえていた。桃葉は安永四年には蜂須賀家のために現宮内庁三の丸尚蔵館蔵「宇治川螢蒔絵料紙箱・硯箱」のような凄まじい名品を制作している<sup>10</sup>ので、それ以降は、単なる宣伝として「蒔絵師 飯塚桃葉作（花押）」の銘を入れるような動機は弱いはずである。この銘が宣伝効果を狙ったものならば、重喜隠居以前の作であると考えられ、出土品の届け出や老中列席御覧のあった明和五年が、制作年として最も可能性が高い。しかし、よほどの晴れ舞台を記念した銘であれば、

安永四年以降である可能性もある。そして、宝物が、妙心寺に納められた安永六年に制作年の下限を求めることができる。

### 雲龍文様の類品

「瑞雲丸龍蒔絵笛筒」一管 初代飯塚桃葉作

(連管 銘 鳳凰)の附) 東京国立博物館蔵

同じ雲龍文を見ることができる初代飯塚桃葉の作品として、右にあげた連管の笛筒がある<sup>⑤</sup>。この笛筒は、梨地ではなく、金切金を整然と敷き詰めた切金地に仕立てられている。厨子に比べて瑞雲の高蒔絵の肉が厚く、龍が丸文となって、その爪で貝の象嵌による宝珠を、その尾では銀高蒔絵による剣を掴む表現が見られるなどの違いはあるが、龍の玉眼やその指の第一関節に生える毛を含め共通点が多く、厨子の意匠の転用と考えてよいだろう。

本稿では当初、単に厨子の意匠の類例として触れるつもりであったが、調べを進めるにつれ、この笛筒は桃葉の生年を確定し得る極めて重要な事例であることがわかった。しかし、諸事情により、本稿での詳述はかなわなかった。今後そのような機会の巡ることを祈りつつ、ここでは大胆な推測を述べておくこととする。

東京国立博物館の竹内奈美子氏にご教示いただいた同館旧台帳の記述によれば、この笛筒は昭和十四年(一九三九)九月十九日に侍従職より引き継いだのが最後の記録である元御物で、欄外には「京都」とある。御物時代の旧台帳は宮内庁のみ存在し、残念ながら非公開なのでそれ以前のこととは確認できない。しかし、注目すべきは龍笛の筒下方に記された蒔絵銘「行年六十三歳／観松斎(花押)」

である。

先述したように、「観松斎(花押)」銘はおそらく蜂須賀家御用にのみ用いられた銘であるので、この笛筒も元来は蜂須賀家の下命によつて制作されたものと推測される。さらに重要なのは、「行年六十三歳」の行書銘である。高尾氏によれば「初代桃葉では、行年銘入の作品は、唐子壽字蒔絵印籠と前記、土佐光貞下絵の三点とを合わせ、世界で四点のみが現存し、全て同じ六十六歳の製作である。絶作に近い製作と推測され、極めて貴重である」そうなので、この笛筒は現在のところ唯一の六十三歳銘の例として、なお一層貴重である。

何故、数ある初代桃葉の在銘作品の中でも、行年銘は六十六歳と六十三歳しか現存しないのか。人が落款に行年を入れるのは、還暦過ぎが通例で、古稀、喜寿、米寿、卒寿、白寿などの賀寿を記念することが多い。従つて、ぞろ目の六十六歳銘の存在はそれなりに理解される。桃葉の行年銘にこれより高齢の銘が見当たらない現状では、高尾氏の六十六歳が絶作に近いという説も妥当と思われる。では、六十三という中途半端な数字は、一体何を記念したのだろうか。そこで考えられるのが、桃葉の剃髪である。しかも、それは天明七年(一七八七)のことであるので、病没した寛政二年(一七九〇)が、ちょうど数え年六十六にあたり好都合である。

以上の推測によれば、この笛筒は天明七年の作で、厨子の活き活きとした雲龍文が笛筒に先行することになる。そして、これまで全く不明であった初代飯塚桃葉の生年は、享保十年(一七二五)に求め得ることとなるのである。

## まとめ

桃葉の生年が享保十年であったとすると、天授院所蔵の厨子が制作されたと考えられる明和四年から安永六年は四十三歳から五十三歳の働き盛りの時期である。何歳の作品であっても、それぞれが精緻な蒔絵技法を巧みに使い分け、めりはりの利いた意匠を美しい構図に納めているのは、初代飯塚桃葉の成せる技で、今後、この厨子は桃葉の優品の一つに数えられることだろう。

最後に、長くお寺に伝わった貴重な所蔵品の調査と写真の利用をご許可くださったばかりか、厨子の扉修理と飾り金具の鋳の補充を条件に、この厨子、銅塔および銅観音立像を、当館に短期で預け下さった、天授院ご住職、雪丸令敏老師に、心からの感謝を申し上げる。また、その扉の修理と鋳の補充を買って出てくださいました村浩之亮氏にも深謝申し上げます。お二方のご尽力を以って、本稿発行の頃、当館平常展示館の漆工展示室にて、この厨子の陳列が実現する予定である。多くの方に御覧いただければ幸いです。

## へ註

- 1 拙稿「初代飯塚桃葉の蒔絵作品(その1)―印籠二合と脇息一基―」(作品紹介)『学叢』第二十五号 京都国立博物館 二〇〇三年五月。
- 2 久保智康「妙法院伝来「豊公遺宝」の柄鏡―中世後半―近世初期における銅鏡船載の二相―」『学叢』第二十二号 京都国立博物館 二〇〇〇年三月。この厨子に安置されている銅塔および銅観音菩薩立像とともに出土したとされる銅鏡についての論文で、「鏡は木彫漆箔雲形鏡台に立てられ、銅塔も金梨地蓮池文平蒔絵(扉内面は雲龍文高蒔絵)

厨子に納められている。」と説明。同右。

- 4 田野井武男「西見野村長光寺と古鏡について」『鹿沼史林』第二十五号 鹿沼史談会 一九八五年十二月。
  - 5 妙宏良湛『日蔭草』文化十二年(二八一五)序。
  - 6 秋里籬島『都林泉名勝圖繪』寛政十一年(二七九九)刊。
  - 7 勝尹はこの明和五年の五月に亡くなっており、同年の六月、嫡子で十九歳の勝全(一七五〇―一七九六)が將軍家に初見している。
  - 8 「領主より」は台覧に差し出す主体を表すと理解するべきであろう。徳島県立博物館の大橋俊雄氏にご教示いただいたところによれば、明和期に、幕府の右筆が、蜂須賀家に桃葉の印籠を依頼した記録も存在するそうである。
  - 9 徳島県立博物館の大橋俊雄氏にご教示いただいたところによれば、明和期に、幕府の右筆が、蜂須賀家に桃葉の印籠を依頼した記録も存在するそうである。
  - 10 『成立書并系図共』(大橋俊雄「飯塚桃葉関係史料―飯塚家の成立書を中心に―」『漆工史』第十五号 漆工史学会 一九九二年 所収)に、「十一月二日御細工出来候二付爲御褒美白銀十五枚被下置候」とある。
  - 11 同右『成立書并系図共』の記述。
  - 12 稲葉新右衛門「装剣奇賞」第六卷 天明元年(一七八一)刊。
  - 13 高尾曜「飯塚桃葉の印籠」『華麗なる装』徳島市立徳島城博物館 二〇〇三年十月。
  - 14 同「詳解『装剣奇賞』」『印籠工名譜』Gabor Wilhelm, Yo Takao, & Yukari Yoshida, *Sleeping Beauties: Sagemono and Netsuke*, Yanabe Co., Ltd, Tokyo, 2004.
  - 15 大橋俊雄「初代飯塚桃葉の作品」武田恒夫先生古稀記念会編『美術史の断面』清文堂 一九九五年。
  - 16 宮内庁三の丸尚蔵館の五味聖氏、漆工芸研究家の高尾曜氏のご教示による。彦根城博物館編『日本の楽器―織りなす音・雅びの世界―』彦根市教育委員会 一九九六年十月 所収(図109)。
- 本稿執筆現在、笛筒は東京国立博物館で陳列中であつたが、残念ながら筆者は未見で、同館の竹内奈美子氏のご高配により部分参考写真で確認し得たのみである。さまざまな情報をご教示下さった竹内氏、五味氏、高尾氏にこの場を借りて深謝申し上げます。
- 前掲、註10、『成立書并系図共』。